平成 19 年度　文部科学省 「特色ある教育支援プログラム（特色GP）」に採択

テーマ　　保育者養成校の子育て支援ボランティア体験
―「子育て応援隊」の企画と実践 ―

1．取組の概要と選定理由

【概要】

地域との連携を目的とした 2 連方式のボランティア体験型教育です。一つは、建学の精神「思いやりのある保育者養成」と関連して、「総合演習」科目で全学生が年間 3 回以上の地域ボランティアを実践しています。ゼミでの基礎学習を踏まえて学生が自ら計画し選択して、様々な地域で多種多様なボランティア活動を体験し、ボランティア精神を学ぶ教育です。

もう一つは、本学の育児文化研究センターがその事業企画をして子育て支援という明確な目的をもった諸活動に「子育て応援隊」と称して、学生と教員が協働参画するボランティア体験です。学生達は自治体や企業、民間団体等と連携して行う子育て支援事業に参加することを通して、保育者に求められる子育て支援力（ニーズ理解や企画力、支援の方法と技術、コミュニケーション能力等）を習得します。本取組はこの 2 つの体験型学習を保育者養成教育に有機的に結びつけ活かし合う形で構成されています。

【選定理由】

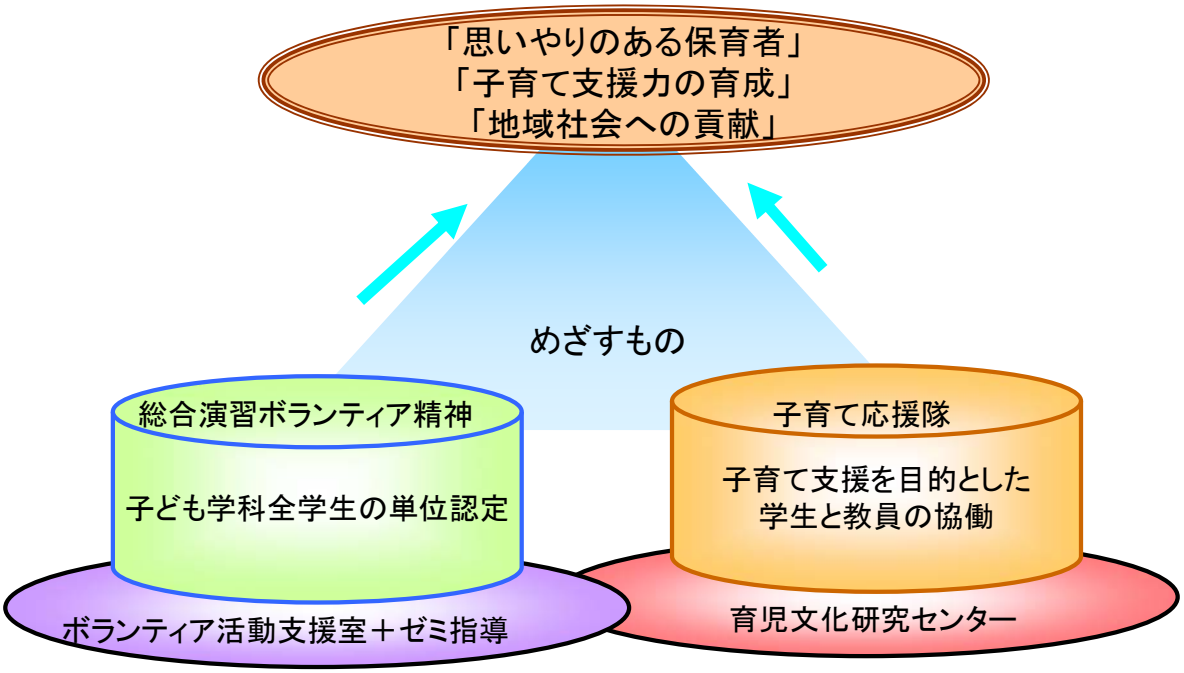
この取組は、必須科目である「総合演習　ボランティア精神」と、学生と　教員との協働で行う「子育て応援隊」の 2 連方式で、保育者養成に向けたボランティア体験型教育です。

「総合演習　ボランティア精神」は 2000 年度から行われており、建学の精神であり、保育者養成の資質のひとつである「思いやりの心と豊かな人間性」の具現化として、その内容は体験に終わらず、研究レポート作成・発表まで繋げている点が高く評価できます。その後、2003 年には全学的機関として「ボランティア活動支援室」を設け、専門の嘱託職員を配置して学生のボランティア活動を側面からサポートしていること、さらに2004年には学科教員の知的財産地域還元の場として「育児文化研究センター」を開設するなど、全学をあげて充実・発展に向かっている点他大学の範となるところです。

しかし、本取組を教育上より有効なものにするためにも、教育目標―学習目標それぞれを明確にすることや、取組の有効性に対するより客観的評価への工夫などを望みます。

（大学基準協会の評価文章）

２連方式の子育て支援ボランティア



２．実施のプロセス

①実施の動機と背景

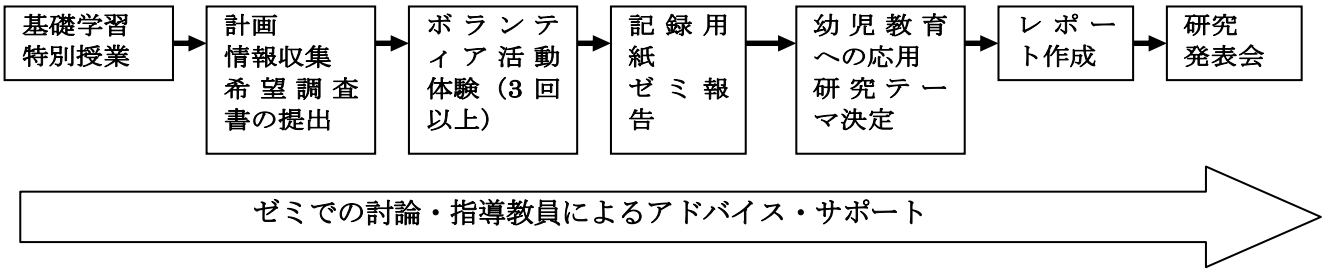
学生が地域社会に出向いて様々な人たちと触れ合い、無償・自発的な行動を起こすことは、建学の精神「思いやりの心と豊かな人間性の育成」の具現化に繋がるものであり、卒業後は子どもの成長発達の援助に関わる保育士や幼稚園教諭になる学生にとっては思いやりの心や豊かな人間性は不可欠の要素です。単なるボランティア体験に終始させないで、その体験から得たことを基に、将来保育者になるために幼児教育に関連した研究レポートをまとめるという一連の学習として位置づけています。6 年間で総計約 2500 回の地域ボランティア活動の実績を挙げています。この実績が地域からも評価され、県内の自治体や諸団体企画の子育て支援行事への学生ボランティアの期待が増大しつつあります。

こうした流れと並行して、三重県でも少子化問題や子育て困難課題が浮上してきたことを保育者養成校である本学でも緊要な課題と受け止め、地域の人々と協働して子育て問題に取り組むという主旨のもとに、2004 年 10 月に「育児文化研究センター」を開設しました。中でも子育て支援活動には研究員＝教員と学生とが協働して、地域の親子支援事業を行っています。センター開設後 3 年の期間にすでに 450 名近い学生が「子育て応援隊」として諸事業に参加している状況です。

②学習の単位化、教育目標の達成について

「総合演習ボランティア精神」は、2 年次開講の通年 2 単位の必修科目で、他の保育

専門科目で学んだことと関連付けながら、少人数で行うゼミ授業です。1年間をかけて、図のような流れで体験的・総合的学習を達成します。



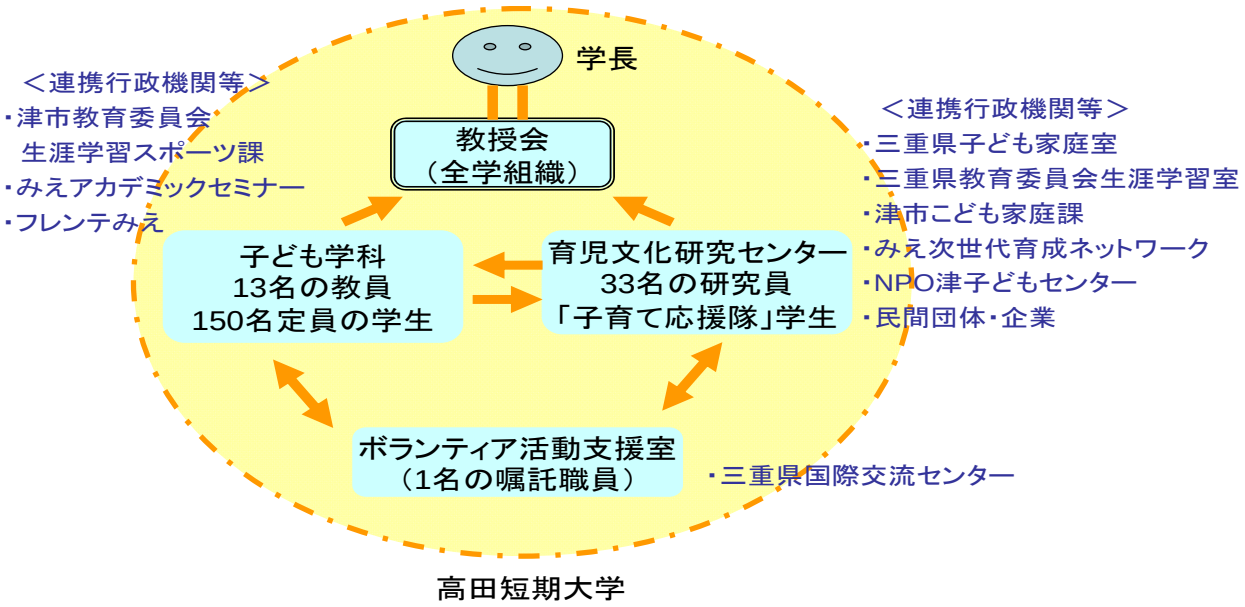
「総合演習　ボランティア精神」単位認定までのフローチャート

③「子育て応援隊」のプロジェクト

「育児文化研究センター」は、三重県内大学では唯一の育児関係の実践的専門研究機関です。本学の保育・幼児教育の専門スタッフが持つ知的財産を地域の育児支援や育児文化の普及のために開放して地域貢献を行う目的で設置され、親子支援事業としては、「子どもひろば」「親子クッキング」「親子製作活動」「馬とふれあう親子フェスタ」等を企画し、年間10回以上の事業を行っています。まだ3年目ですが、県内各地からの親子の参加期待、県教育委員会や健康福祉部子ども家庭室、地元津市教育委員会及び他の自治体からの要請もあって、最近ではこれら自治体との協働・連携の形での子育て支援事業を活発化しています。意志ある学生にとっては、様々な遊びなどを企画し、実際の親子に触れるイベントであるので子育て支援の方法と技術を学ぶ絶好の機会となります。2006年度からこれを「高田短期大学子育て応援隊」と名づけて、教員と学生との協働ボランティアとして活動しています。総合演習で身につけた「ボランティア精神」を「子育て支援」という明確な目的と専門性を持った活動領域に発揮できる応用学習でもあります。今約300名の学生が「子育て応援隊」に自主登録しています。

３．取組の組織性

本取組の実施主体は、子ども学科と育児文化研究センターであり、それらの側面サポート機関としてボランティア活動支援室があります。本学では2004年度から学長のリーダーシップの下「地域に根ざした短期大学づくり」宣言をして各部署でこのことの具現化を図っています。



４．取組の教育的有効性

①ボランティアによる意識の変革

ボランティア活動を終えた学生の主な回答は次のような声です。

- 最初はとても不安だったが、ボランティア活動を体験してたくさんの人と出会い、共感し、助け合うことができて大変良い経験となった。
- はじめは面倒だと思っていたが、行ってみてとても勉強になってよかった。
- 授業を受けてみて、授業を受ける前よりも「ボランティア」について理解することができた。実際に参加できたので良い経験になった。
- 時間があいている時に参加できるボランティアはとても興味が持てたので、何回も違う活動に参加し、そのたびにいろいろな出会いや発見ができてよかった。
- このゼミは私たちにとってとても必要な授業だと思った。これから子どもたちと触れ合っていく上で、「温かさ」や「やさしさ」というものは常になくてはならない、そのことをしっかり学ぶことができた。忘れられない経験となった。

２年間の短大生活の中で貴重な経験となり、将来保育者になるうえで大切なことを身につけたことが実証できます。また毎年、全授業に対する学生からの授業評価では、「総合演習」は５点満点中平均 4.4 の高評価を得ています（2005 年度）。何よりも、幼稚園や保育所をはじめとして子育て機関からの期待が高まっているのが現状です。

②保育者としての人間的成長

保育者をめざす学生は、本取組での各種プログラムにおいて自主的に地域の人達や子ども達と直に接することにより、実習では得られがたい意欲や意識の改革が認められます。特に、地域ボランティアを何回か経験してきて、「子育て応援隊」に参加した学生には、実習と異なり予め想定できないような事態に直面しそれを解決していく力が求められるわけで、表現力やコミュニケーション能力等において応用力が試されることになります。幅広い世代の人たちとの交流の中で、保育系学生として一人の人間として自分がどのように行動すべきかを考えるようになり、貴重な社会性を習得し豊かな人間形成に寄与しているものと考えられます。

このような経過の中で、プログラムの実施に関わった多くの学生は、いろいろなことに意欲的になり困難な事態に直面しても「できる」という自信を深めたと述べています。

５．今後の実施計画

少子化問題、子育て困難の時代にあって、保育者養成校がその専門性を生かした地域社会に向けての活動を展開することは大きな意義があります。今後の計画として以下の３点を考えています。

①教育効果を高めるための指導法改善とコーディネート技術・ノウハウの再構築を図る。

②自治体、民間団体、企業等との連携を拡充する。

③全学的なボランティア活動支援体制の強化によるボランティア活動者の拡大を図り、次世代育成という意味においても有効なものにしていく。

【子育て応援隊の活動風景写真】

子どもひろば

親子クッキング

馬とふれあうフェスタ

子どもひろば

バルーンフェスタ

ふれあいあそび講習

子どもひろば

わいわい広場

わくわくフェスタ